

●池田会長が党結成を提案



池田大作公明党創立者(創価学会会長=当時)

1962年(昭和37年)9月13日の公明政治連盟(公政連)第1回全国大会(東京・豊島公会堂)で、創立者である池田会長はあいさつのなかで、公明議員の在り方として、「大衆とともに語り、大衆とともに戦い、大衆の中に死んでいく」との指針を示された。その池田会長の言葉は、2年後の公明党結成に際し、党の根本指針として党綱領に明記された

公明党結成を提案したのは創価学会・池田大作会長(当時)である。池田会長は同年5月3日の本部総会で、「公明政治連盟(公政連)を一步前進させたい」とし、「時代の要求、大衆の要望に応えて、政党にするもよし、衆議院に出るもよし、このようにしたいと思っておりますけれども、いかがでしょうか」と提案、参加者全員の上承を得た。その際、宗教と政治は次元が異なるとし、従って学会の政治部は解散され、公政連は独立した政治団体として歩むべきであるとし、宗教団体としての学会は、公政連の支持団体、推薦団体として自らを位置づけていく旨も表明された。学会としての「宗教と政治の分離」宣言がなされたものだ。

さらに本部総会から8日後の11日、男子部幹部会の席上で、池田会長は公明党の結成を正式に提案した。「秋に公政連の全国大会が行われますが、その時に、公政連、公明会を一步前進させて、公明党にすべきではないかと考える次第でございます。……わが男子部の決議として、公明党を結成することを要望していきたいと思っておりますが、よろしいで

しょうか」と。大賛同の拍手をもって決議され秋の党結成に向けて本格的準備が開始された。

党結成を半月後に控えた 11 月 2 日、党本部となる公明会館が完成。同 15 日に開かれた公政連の全国代議員大会で公明党の初代委員長には原島宏治、副委員長に辻武寿、書記長に北条浩が就くことが決まった。

結成大会前日の 16 日、原島委員長らが池田会長にあいさつに行ったが、その際の池田会長の直言は党にとって後々の教訓とされた。例えばそれは、結成大会の会場として日大講堂を選んだことに対し、「日大講堂といえは、日本で最大級の会場です。歴史ある大政党の党大会でも、そんな大きな会場は使いません。その大会場を、これから発足しようという、何の実績もない、小政党の公明党が使うというのはどういうわけですか。格好ばかり考え、大きな会場に派手に人を集め、華々しく、結成大会をやろうとする。それ自体、虚栄ではないですか！実績を積み重ね、本物の力をつけてからなら、どんなに豪華な大会場を使おうがかまいません。しかし、最初から、そんな考えを持つのは、思い上がりであり、傲慢になっているからです」等々の戒めの言葉であり、忠告であった。

党大会で発表される政策や方針については公政連で検討されてきたが、政策について池田会長が提案したことはただ一つ、党の外交政策の骨格として「中華人民共和国を正式承認し、日本は中国との国交回復に努めるべきである」ということであった。

そして公明党結成大会。場内正面には「公明党結成大会」の横幕。その右横縦に「日本の柱 公明党」、左横縦には「大衆福祉の公明党」のスローガンの大文字が掲げられた。大会は経過報告、結党宣言、綱領発表と続き、北条書記長から活動方針、最後にあいさつに立った原島委員長は冒頭、党の創立者である池田会長から寄せられた祝電を披露した。それは「公明党の結成大会、まことに、まことに、おめでとうございます。私は、この壮挙が、かならずや日本の政界の黎明となることを信じております。どうか民衆の幸福のため、日本の安泰のため、世界の平和のために、勇敢に前進されますことを祈っております」と。